

「深い悲しみと絶え間ない痛み」

2018年09月29日

ローマの信徒への手紙 9章1節～5節 わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります。わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています。彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです。キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン。

9章から11章までは、イスラエル人と異邦人問題が長々と論じられている。イスラエル人であることを誇るパウロは、イスラエル人がキリストの福音を受け入れないことは深い悲しみと痛みであったが、救済史における神の民イスラエル人の責任と使命は揺るぎないと信じている。この問題をキリストの福音の光から捉え、論じている。

パウロは、「わたしはキリストに結ばれた者として真実を語り、偽りは言わない。わたしの良心も聖霊によって証ししていることですが、わたしには深い悲しみがあり、わたしの心には絶え間ない痛みがあります」と書き始めている。パウロは真実を語り、聖霊に支配されている良心もそれを証ししているが、パウロの心に深い悲しみがあり、絶え間ない痛みがある。それは、「わたし自身、兄弟たち、つまり肉による同胞のためならば、キリストから離され、神から見捨てられた者となってもよいとさえ思っています」ということである。非常に過激な言葉で、その内容はイスラエル人がキリストの福音を受け入れ、救われるのであれば、キリストから離され、神に見捨てられてもよいと言っている訳である。

パウロは自分を「異邦人伝道者」と言い、周りの人々も、そのように評価していたが、それは、結果的にそうだったのであり、パウロの宣教の第一の対象はイスラエル人であった。主要都市を巡り歩いて宣教した時、どの都市に行っても、まず、イスラエル人が建てたユダヤ教の会堂（シナゴグ）に行き、キリストの福音を語っている。今日の私たちから見ると、ユダヤ教とキリストの福音は相容れないものと思えるが、パウロには、主イエスの出来事は旧約聖書の預言の成就であって、主イエスの十字架と復活により、イスラエル人に救いがあると宣教した。ところがイスラエル人は、キリストにはダビデの子として、権力・権勢をもって支配する栄光の姿を期待していたので、十字架で無残に敗北した主イエスをキリストと信じることはできなかった。また、復活もイスラエル人には受け入れ難いことであった。パウロは熱心に伝道したが、イスラエル人からは拒絶され、それが、パウロの悲しみと痛みであった。先の8章の後半で、キリストの愛から、神の愛から、何をもってしても、引き離すことはできないと豪語した。ところが今、パウロはイスラエル人が救われるのであれば、キリスト・神から捨てられても構わないと言っている。いかに、同胞イスラエル人を愛しているかが分かる。そして、「彼らはイスラエルの民です。神の子としての身分、栄光、契約、律法、礼拝、約束は彼らのものです。先祖たちも彼らのものであり、肉によればキリストも彼らから出られたのです」と、イスラエル人に神から与えられた特権を披瀝し、「キリストは、万物の上におられる、永遠にほめたたえられる神、アーメン」と、キリストは永遠にほめたたえられる神であると賛歌している